

日本商業学の源流 (その二)

山 崎 仁

目 次

1. なぜ日本商人学研究が必要か
2. 日本町人生成の源流「市町と町屋、城下町」
3. 特殊な日本町人の基盤形成「寺内町と他屋」
4. 日本海商町人の生成「堺町人の根性」
5. 日本商人の源流「行商人と市商人」

1. なぜ日本商人学研究が必要か

本稿は、「日本商業学の源流」研究「その二」にあたる。筆者は、「その一」でヨーロッパ商人学の源流をさぐり、西欧に発達した「商人論商業学」が、明治の開国後の日本商業学の形成にどのような役割を果たしたかに注目した。筆者は、この「商人論」の著書に注目して、ヨーロッパ商業学の源流は、イタリー学者ドミニコの「商人論」(Negotiante, Dominico, 1638)であるとした。北部イタリーの海港都市は、世界でもっとも早く商業が発達したところだから、商業活動が活発化するにつれて商業技術も当然に発達したと考えられるから、商取引の実務研究学即ち「商人論」が、この地でスタートしたことは当然のことだと思う。ただ、商人の家伝書的研究は、この著書の発表以前にあったと思うが、一応の体系書としての研究書は、ドミニコの商人論がもっとも先駆書だということである。

いま、上記の著書の出版時点を、わが国の歴史に当てはめて見ると、徳

川家光，第三代将軍治世の寛永十五年となる。これより先の寛永十年には，幕府は政權安泰保持を目的として，海外との交流禁止の鎖国令第一号を布告している。この鎖国令は，その後，連続して毎年追加されて，ついに寛永十六年第五号をもって，日本は完全鎖国化したわけである。なお寛永十四年には，信仰の自由のためのキリシタン宗徒の反乱が，肥前の島原と肥後の天草に起っている。幕府は，この反乱鎮圧のために中央より総指揮官松平伊豆守信綱を中心に，かなりの軍勢を現地に派遣しているが，わが国幕府の封建体制は，まだ著しく不安定な時代であったのである。従って，上記「商人論」が世に出た当時の，時代的背景を西欧のそれと比較して見ると，わが国は，政治・経済・文化の面で，ヨーロッパより著しく遅れた状態にあったと言えるのである。

西欧経済の発達，とくに商業活動の発展の要因について注目すべき点は，16・7世紀頃の西欧国家は，政治体制の面ではまだ封建的王侯国家の段階にあったが，これらの王侯国家は，経済政策の点で，とくに重商主義方式を採用し対外通商に積極的であったことだと思う。外国との通商に依ってのみ富国政策は実現できるという政治的信条が，外国との商取引を活発にし，関連的に商業資本主義が急速に発展する結果となった。また，このことが産業資本主義の形成を早め西欧諸国の先進性を促進させたのだと思う。商人学形成の面から注目できる点は，重商主義が海外通商を活発にし，各種の商業技術を開発し，関連的に実務商業学を発展させたということである。

わが国の場合は，徳川幕府によって戦国時代が終結して，一応の中央集権体制は実現したが，その初期の段階で，鎖国主義に突入したから徳川政權下では，対外通商を素材とする商取引技術の修得や関連的に広く通商文化の移入による学術研究は著しく遅れることになったということである。筆者は，商業学の源流研究「その一」で，幕府政權の崩壊と同時に，明治政府の指導者らは，鎖国時代の経済活動の後進性を痛感して，西欧的な経

済体制を導入するために、西欧商活動の「商事慣習」の学習から始めて、「商事要項」の習得へ、さらに「商業学」の研修へと三段階を急速に駆け上がる政策を追求したことを指摘した。

上記のように、わが国は、明治新政府のスタート後半世紀の間（1868—1912）に、徳川幕府初期の完全鎖国実施（1639）以来二百余年の遅れを、とも角も取り戻した。この間に、西欧先進国の高度の経済構造の諸モデルを習得して、商業資本主義から産業資本主義への行程を駆け足で走ってきた。さらに、大正から昭和にかけて、とくに第二次大戦後の三十数年間の経済躍進の実績を評価すれば、わが国は、経済の面に限っては、ある部門では、欧米先進国と肩をならべ、ある部門では、追い越したとも見られる。しかし、この実態を批判して、日本の経済システムはすべて欧米先進国の物まねだと悪評する者もでてくる。確かに、明治以来の研修態度は物まね的で、いわゆる「洋才」万能主義に終始したと言える。しかし、ある者は「和魂洋才」だと自己弁護して、ヨーロッパの近代知識を吸収して成果をあげたのは、「和魂」があったからで、西欧人の才覚・洋才は、和魂即ち日本人の心が基盤にあったからだと言主張する。では、この弁護を評価するとすれば、筆者は、和魂とは何か、経済活動を規定する和魂なるものの実態をさがし出し、分析しなければならないと思うのである。

筆者は、日本の商業資本主義と産業資本主義を作りあげた日本経済人の根性、日本商人あるいは日本町人の根性が、いわゆる和魂であると定義づけたい。では、この町人根性はいつ鍛えられたかということになる。それは明治時代の欧米主義万能時代ではなく、徳川幕府の執政下、鎖国の二百数十年の間に、士・農・工・商と最低の階級として虐げられた時代であったといえないか。西欧の資本主義を作りあげた根性は、マックス・ウェバーによると、ピューリタン精神だということだが、では、日本資本主義を作りあげた根性とは何か。筆者は、徳川鎖国時代に、わが国の町人は、具体的

には大坂町人とか江戸町人や、また、日本各地で生成された町人が、日本固有の資本主義を作り、今日の新しい先進型の日本経済体制を作りあげたのだと分析する。従って、日本町人の根性とか商理念、さらに古い時代の商技術と商慣習に接近することが、西欧の古い商人論に対応する日本商業学の源流分析となると思う。本稿は、「日本商業学の源流をさぐる」と題して、明治以前の、まだヨーロッパの「商事慣習」が導入される前の日本町人の実態にできる限り接近したいと思うのである。

では、この古い「源流さぐり」は、商業学の学問体系作りにどんな役割を果すものであろうか。商業学の「体系知」は、商人が商売すること、商取引すること、さらに商業することなどに関する実践的な技術的知識の「一貫的排列原理」(eindeutiges Zuordnungsprinzip)であると定義付けられる。そして、この実践的知識には、歴史的に、それぞれの社会の商人が体験した固有の文化的価値が染みこんでいる筈である。従って、日本人の商業的知識にも、その古い歴史の中で培れた貴重な文化価値が必ずあることを忘れてはならない。しかし従来は、わが国の経済学者も商学者も、この固有の歴史的文化的価値性を曖昧にして、もっぱら明治以後の西欧的知識志向で、日本経済を評価し、また、商業学の体系化をこころみようとしたようである。筆者は、上記のように日本商業学の形成に、明治以後よりも以前の、歴史的過程で培れた諸材料を重視したい。例えば、庶民の生活態度とか、武家中心の厳しい封建的権力体制の底辺で生き抜いた町人の生活態度とか、さらに彼らの根性の支えとなった、古い時代の儒僧らの処生哲学、価値観などは、実に貴重な日本固有の商業学の研究素材であると確信する。筆者は、日本商業学の形成のために、第一に歴史的方法(Historical Approach)を考え、第二にその歴史的素材知識の基盤の上に理論的方法(Theoretical Approach)を考え、第三に西欧的商業体系知を導入した商業活動、商行為、商業政策等の実践的方法(Practical Approach)を考えたいと思

う。従って新しい日本商学の体系として、「商人論」的商業論、「体系知」的商業論および「商業実践」的商業論の三つの学的構成を意識している。他の表現方法でいうと歴史的商業学、理論的商業学および商業実践論の三者による商学体系の構成である。本論の「日本商業学の源流」は、その第一項目の歴史的商業学への接近を意図するものである。

2. 日本町人生成の源流「市町と町屋、城下町」

日本商業学研究には、日本商人論への接近が前提となると前項で指摘した。商業学は商業知の体系であり、その商業知は商人の生活知である。その社会とその時代に生きるための実践的技術知識であるから、その商業知は、歴史的社會産物ということになる。わが国商人の源流をさぐると、町人と商人の区別が明確でなく、町人も古い時代的産物で、まず町人が生まれて、その町人の特殊の生業形態から商人性町人が区別づけられたと見られる。この特殊の生業形態の中から商業知即ち現代用語の「流通知」が発生したのであるから、流通知学の前提に、日本町人の源流を探ることが大切だと思う。本項は、日本町人を生んだ基盤分析である。

日本の商人論は、一般に徳川時代の大坂（阪）と江戸の城下町の町人研究から始められているが、日本町人発展の源流をさぐるとすれば、もっと時代を遡って「室町時代」（延元一年、1336年に足利尊氏が京都室町に幕府を開設してから、永禄十一年、1568年に織田信長が將軍足利義昭をたてて京都に入った年間）の町人の動向を知る必要がある。この年代にはすでに、地方の農業生産物および農村の手工業品が「市町」（いちまち）へ盛んに流入している。京都や奈良の市町だけでなく、地方でも商品の流通活動が発生したが、地方産物の京都・奈良への流通に「問丸」（といまる）商が活躍し始めた。市町の形成については、京都では、すでに立派な町作りが見られ、代表的な祇園大路の町並みには、「神人」（じにん）寄人という座に属し

た各種職人の住居や、「地下人」(じげにん)、「有徳」(うとく)という裕福な商人達の住居が建並んでいたと記録される。このような商工人の集合地が町(まち)と呼ばれ、この町の居住者が「町衆」であった。やがて「町組」自治組織ができたが、この町の構成員でも、「町人」と自称することが許されるには、幕府当局に「棟別銭」(むねべちせん)を納めたり、また、「町人夫」を負担したり、幕府の命令遵守の共同の責任を負うという条件が付されていたという。従って町人とは、この意味では、町組に居住する一定の条件付の商工者を意味するもので、「町衆」の特権的名称であったのである。この時代の史実(応永26年1419)によると、町人の呼称は、商人の概念とは区別して理解されていたことになる。しかし、実際には、町衆という構成は、職人商人の集団で、大工・鍛冶・檜皮師・畳屋・櫛屋・針屋・筆屋・桶屋・茶屋・油屋・米屋・煎餅屋・田楽法師その他の生活関係の技術売物の人びとであったといわれる。

京都は室町幕府の本據であって、当時のわが国の政治と経済の中心であったことになるが、京都で、上記のような町集団作りが始っていたことは、従来の農業経済の段階が、ようやく商品経済へ移行し始めたことを物語るものである。当時の政治体制は、中央に幕府はあっても、地方には多数の大名・領主らの荘園的土地支配者があって、百姓の年貢米の収奪によって武力を蓄積していたのである。しかし、これらの荘園的支配者らは、生活手段が農業経済から商品経済へ移行する傾向を察知して、年貢米の収奪方式よりも、商品経済に便乗した収奪の効果性に気付いたということで、これが自己の権力據点の市町作りの始めである。地理的交通の要地を選定して、その地に新しい據点を設置し、その周辺に多数の職人的商人を集結居住させること即ち城下町作りである。このような城下町や門前町あるいは寺内町などが室町時代の後期にあいついで出現したが、その集団地域での町衆の組織化と町衆の流通活動の展開は、わが国の商人論の一つの源流期

と見られる。なお経済の発展段階に関連して特記すべき点は、この時代に、幕府や海港地の守護領主達が、西欧的なマーカンティリズムの利権拡大方式に意欲を燃やし始めたことである。即ち、対外貿易によって貨幣的利潤の獲得方式を考え始めたことで、当時の相手は対明国取引だったが、彼の地より高貴な贅沢品を輸入して巨利を得ようとする先駆的商業資本主義の発想が芽生えたようである。「永楽通宝」(永楽銭)が室町時代に大量に明国から輸入され、通貨として貯蓄の対象となり始めたからである。「永楽銭」とは明銭のことで、洪熙・永楽・宣徳など各種あったが、明国永楽九年・1411年の鑄造のものがもっとも多く流通したので当時の流通通貨を通称永楽銭としたものである。この通貨の流通が、対外取引を手段とする重商主義的蓄財の風潮を刺激して、わが国の貨幣経済体制への先鞭をつけたことになると思う。外国貿易によってこの種の蓄財を考えた先駆的商人は、泉州堺や北九州博多などの海港を據点とした海港商人で、当時「和寇」といわれて恐れられた一種の武装的通商であったと思う。堺商人や博多商人らによって対明国、対朝鮮貿易が積極的に始められたのである。このように徳川鎖国以前のわが国の海商町人の活躍は、15・6世紀に、西欧海港都市で活躍したヨーロッパ商人の豪商ぶりに匹敵するものがあったと思うのである。

上記の室町期の町人像の解説資料は、14世紀末から15世紀初期にかけて発行された『庭訓往来』(ていきん往来)という世情消息文集によるものだが、わが国で古い時代の庶民の生活を知るための源流さぐりの資料として、この「往来物」は貴重な文献である。初めに、平安末期の「明衡往来」、「東山往来」、次いで鎌倉時代の「12月往来」、「新12月往来」があり、この室町期の『庭訓往来』は、著名な資料である。町人生成の有力な基盤となる市町作りや町屋作りが京都の町で進展する頃、地方大名の據点も次第に確立したが、すでに指摘したように大名は、領内統治の新しい方式として城下

町作りを競って行うようになった。とくに室町後期には、地方の大名豪族の城郭中心の城下町が各地に見られた。その初期のものは、大内義隆(1507—51)の山口城下町、後北條氏の小田原城下町、武田信玄(1521—73)の甲府、佐々木氏の近江の石寺などが注目されるが、やがて據点は町経済と一体化する方式に移行されるようになり、新城郭を平地に築き、その周囲に家臣の居宅や職人・町人の居住区域を設置し、武士と町人との消費経済的交流の便、職人の技術援助による経済的據点強化策が採用された。商人を強制的に城下へ集め、城下町以外での商業の禁止、強制的に城下町道路を通路として使用させ、さらに商人を城下町に集結させる方策として、「楽市楽座」政策、「地子」の免除、「徳政」の除外などを行うなど、積極的に城下町の発展を図ったのである。

楽市楽座政策とは、特権的な座および市を認めないことで、行商販売の商人に対して、城下町で販売する限り、同業者の仲間組織・座の規制から逃れさせ、できる限り行商人を自己の城下町へ集中する奨励策で、城下町中心の繁栄と、自己の領土内の貨幣経済の発展を図ることがねらいであった。しかし、領主は座商の解放の反面で、自己の監督下で商業活動を行うよう厳しい統制策も忘れていなかった。この政策は、天文十八年(1549)に近江石寺で領主佐々木氏が始めて試みたのが先例となったといわれる。次に「徳政」の除外とは、鎌倉・室町時代に現れた徳政令に係る問題で、徳政即善政を意味し、債権債務の破棄を命ずる法令のことだが、鎌倉以前は、飢饉とか天変に際して大赦の意味で行なわれたが、室町幕府は、幕府の財政的危機を避ける目的でこれを利用した。最初は、永仁五年(1297)に御家人の窮乏を救う目的で発令し、次は、正長一年(1428)に、「徳政一揆」対策で発令するなど、将軍足利義政は一代に13回も徳政令を発している。室町末期には、大名領主らの私的徳政が行なわれたが、町下町を発展させるために商工人の優遇策のために徳政除外が試みられたのである。このよう

に、大名領主は強制と恩恵策を併用して城下町作りを行ったので、室町後期は、城下町は急速に発展した。著しい例は、信長の安土城と城下町、蒲生氏の日野・松坂、秀吉の大坂、秀次の近江八幡、徳川氏の江戸・名古屋等である。その他、桑名・金澤・岡山等にも城下町が発展したのである。

城下町の組織構造は、経済的に見れば一個の地域的なマクロ経済圏の構成で、政治的権力と経済的構造が一体化する流通関係の形成という発想に基づくものである。居住地域については、階級的差別の立場で、侍・職人・商人と居住地域は峻別されていた。職人町・商人町も各職業に応じて専門的町割が行なわれて、やがて城下町の中に、職人工業地的な性格と商業地的性格が区別づけられるようになり、城下町自体が、次の経済発展段階への足場となって行くのである。

以上の町人論と商人の源流さぐりで、すでに室町幕府終末の段階で、武家主導型の町づくりがかなり進み、町人と商人の存在・性格が明確になるまでの経緯が明らかになったが、本項は、ここで、歴史をもう一段階源流へさかのぼって、鎌倉時代に初めて現れたとされている幕府の政策的町作りの模様に注目したいと思う。鎌倉幕府期は、約140年間で、通説では、源頼朝が、治承四年(1180)に兵を起し、鎌倉に據点を持ち、それから約十年後、建久三年(1192)に征夷大將軍に任ぜられたのを始点として、その後、幕府は京都朝廷との間に公武の政権の対立抗争を続けた末に、その終点としては、足利高氏が元弘三年(1333)に征夷大將軍となって終る期間ということである。この期間の出来事について、当時、幕府の役人が集録したとされる歴史記録書『吾妻鏡』があつて、幕府の政治・経済・文化に係る貴重な資料を残している。この記録書は、上記の頼朝挙兵の治承四年4月9日付で始り、文永三年(1266)7月20日に至る87年間の鎌倉幕府の公式記録で、一部の間欠録があるが、われわれは、この資料の中から、日本町人の最源流を、13世紀初期の鎌倉の町づくりの中に挙証しようと思うもので

ある。その例証として引用されるものは下記3点である。

(イ) 建保三年(1215)7月19日付の記録,「町人以下,鎌倉中,諸商人の員数を定むべきの由,仰せ下さる云々」。

(ロ) 建長三年(1251)12月3日付の記録,「鎌倉中,在々処々の,小町屋及び売買設けのこと禁制を加うべき由,日ごろその沙汰あり,今日,かの所,(大町・小町・亀谷辻・和賀江・大倉辻・乗和飛坂山上)の六か所指定される」⁽¹⁾

(ハ) 文永2年(1265)3月5日付の記録,「鎌倉中に散在せる町屋等を止められ,9箇所を免ぜらる」(これによって,大町・小町・魚町・穀町・武蔵大路下・順地賀江橋・大倉辻の7箇所が御免所となった。)

上記3点に引用した『吾妻鏡』の記録から,われわれは,鎌倉幕府は,鎌倉の町づくりに関連して,行政的にも商人・町人の商行為に干渉・取締りを厳しくしていたことがわかる。幕府は,特定の場所を「町屋」作りの地域に指定したり,町屋作りから,町人以下諸商人の員数までも制限したりしている。幕府が,町人と商人を区別している記録から,われわれは,町人とは所定の地域に「町屋」を建てて居住している者達のこと,主として職人達を意味し,「道々の者」あるいは「とりえある族」のこと,道の体得という特殊の技能者であることを知り,彼らは,町屋という家屋に居住し,幕府の行政的権力に対して,保護と規制の両面関係をもつ者たちであったことがわかる。彼らは「町人」の特権をもつ者たちであり,これに対して鎌倉の商人とは,町屋に住居を持たず,ただ鎌倉町内に立入って,「ふり売り」あきないをするいわゆる行商人たちのことか,あるいは在々所々にてあきないする者達を意味し,さらに「売買設のこと」と表現している「市」(いち)で,諸産品をあきなう者たちのことと理解していたようである。しかし,町屋に居住していた町人という職人達も,手工業を職能としながらも自己の製品を売ることができたから,この意味では重複した

職人商人であったことになる。この鎌倉幕府が行政上あえて区分して取扱った規制方式から、重複した町人概念が生れるが、この町人の重複性は鎌倉時代からスタートしたものと思われるのである。

次に、町人の物産販売施設としての「見世棚」(店)の概念については、『庭訓往来』によると、町屋の建築に関連して、「市町は、辻・小路を通し、見世棚を構えさせて、絹布のたぐい、贅菓子(にえがしー果物)の売買に便であるようにはからうべきこと」としてある。⁽²⁾ この用語の見世棚とは、商品を陳列する施設を意味し、「辻・小路」(大小の道路)に面して施設することが要件であった。また、「市町」(いちまち)とは、初めは一定の日時に定期的に人々が集まる「市」の立つ場所を意味したが、やがて見世棚の施設のある場所を「市町」と呼ぶようになっていく。しかし、見世棚が町屋に施設されて、常時市(いち)興行がなされている地域が、やがて「市町」の意味になったようである。従って、鎌倉時代の「市町づくり」とは、見世棚の施設を備えた町屋作りの意味で、幕府はこの町屋の中に「市人」(いちびと)という特殊な技能者を集めて定着させようとしたものである。

以上、本項では、日本町人を生んだ源流的基盤について、室町時代の京都の市町と町屋の由来と地方城下町の形成、さらに鎌倉時代にさかのぼって幕府による鎌倉の町屋作り模様を概説したものである。これによると日本町人と日本商人の源流は、十三世紀頃の鎌倉期に始り、室町期の十四・五世紀に、ようやく基盤作りができたということになる。源流的町人の世渡り姿態についての研究資料も、『吾妻鏡』や『庭訓往来』などの記録から得られるのが中心となっているようであるが、これらの各種の資料から、十五世紀初期の頃の市町の源流的商人(職人的商人)達は下記のような名称で世渡りしていたということである。

鍛冶・鋳物師・巧匠・番匠・木道(このみち)・金銀銅細工・紺搔(こうかき)・染殿・綾織・蚕養(こかい)・伯楽・牧士(まきし)・檜物師・ろくろ師・

塗師・蒔画師・紙漉（かみすき）・唐紙師・笠張・蓑売・廻船人・水主・梶取・漁客（すなうど）・海人（あまうど）・朱砂・白粉焼（しろもの）・櫛引・鳥帽子折・酒沽（さかうり）・酢造・弓矢細工・土器作・葺主（ふきし）・壁塗・猿楽（さるごう）・田楽・獅子舞・傀儡師（かいらいし）・琵琶法子・県御子（あがたみこ）・傾城・伯拍子その他計80種目の輩を市町づくりの場合、よび集め定住させるべきものとしている。⁽³⁾

参 考 文 献

1. 日本の歴史（町人），中井信彦，小学館
2. 町人，坂田吉雄，弘文堂
3. 日本史辞典，東京創元社
4. 近世城下町の研究，小野均，岩波
5. 近世都市の発達，小野均，岩波
6. 註(1) 日本の歴史，P 39
註(2) 同上，P 21
註(3) 同上，P 22，P 24

3. 特殊な日本町人の基盤形成「寺内町と他屋」

前項では、鎌倉の町づくりを源流とする、武家政権の権力保持を目的とした町屋衆の集結政策の結果から生れた市町町人の発生に注目したものだが、日本町人の源流には、もう一つ、仏教による信仰集団を基盤に形成された寺内町と他屋衆町人があることを知らねばならない。

「寺内町」（じない）の由来については、室町時代末期から近世初頭にかけてのころ、浄土真宗の「御坊」（ごぼう）・寺院を據点として、遠近の百姓門徒らが集り、その周辺に「他屋」（たや）と称する、御坊参礼と宿泊目的の家づくりを行い、その周辺には、自衛のために濠作りなどをしたため、一見して武家政権の城下町ふうとなったのを、寺内町と呼んだとされる。この種の寺内町作りの動因となったのは、浄土真宗の蓮如上人で、彼は、1465年・寛正六年に大谷の本願寺を比叡山の僧兵に焼き打ちされ、京を逃

れて、近江や北陸地方を巡礼布教したが、布教先各地に滞留中に、布教を
とうして、武家の搾取と貧困の象徴的存在であった百姓どもに信仰的結
集・団結によって保身自衛の精神を植えつけた。これが貧者の信仰の結集
としてのあいつぐ御坊の建立であり、その御坊を護り、また、そこに定着
して自己防衛を行なうための御坊町集団寺内町の形成設置ということであ
ったと思う。蓮如上人は、ふつうの宗教的聖人ではなく、宗教政策的布教
の達人であったと想像されるが、彼の通過したさきぎきに、この種の御坊
と御坊を囲む寺内町が建設されていることが証明するものである。蓮如上
人の御坊町作りの代表的例証は、加賀と越前国境に立地した吉崎の寺内町
建設である。この建設は、文明三年から七年にわたって続いた(1471—75)
が、近郷の信徒によって御坊が吉崎の山上にまず建立されて、やがて加賀・
越中・越前三ヶ国の門徒らが群をなして集り、これらの門徒らは「たやと
号する」家屋を建築して、蓮如御文によると(1473年文明五年)、当時すで
にその家屋棟数一・二百を数えたとある。蓮如は、この棟屋の住人達を「た
や坊主」または「たや衆」とその御文に書いているが、その「他屋」の意
は研究者もハッキリしないと言う。筆者は、単純に推測して、御坊の寺風
本造りに対して、通りに面してならび建てたその他の庶民家屋風の作りを
とくに「多屋」とか「他屋」と俗称したのではないかとする。蓮如御文の
「たや坊主」とは、自分の郷里に自己寺を持ちながら、本山の寺務運営の
ために、この地のたやに在留する者たちのことで、この他屋には俗人門徒
も多数居住し、これらが「たや衆」である。吉崎御坊の礼拝に地方の門徒
が参集して、たや衆は宿坊の役割を果しながら、やがてこの衆徒らは寺内
町の商業的町人に変格してゆくものである。

蓮如が吉崎御坊に定着してから三年目が、文明五年(1473)だが、これよ
り先、応仁元年(1467)に、京都を中心に武家の権力闘争である応仁の乱
と、文明の乱があい次いで起っている。幕府を支配しようとする東西両軍

の闘争は、約7年続いたが、この権力闘争の余波が、越前と加賀に波及した。越前守護・朝倉敏景と守護代・甲斐八郎政盛とが吉崎附近で激戦を展開することになった。この戦闘で、甲斐勢は一旦加賀へ後退したが、援軍を得て再度越前に優勢反撃に転じて、吉崎山附近に進出した。これを迎え打つ朝倉敏景と富樫政親は、吉崎御坊町の主管者・蓮如に、たや衆の援助を依頼した。蓮如は仏門者として苦慮し、この懇請を避けようとしたが、ついに避けきれず、この寺内町のたや衆が武力闘争に参加することを認めたものである。これが史上著名な「一向一揆」であって、時に文明五年十月で、その戦闘の決議はたや衆名でなされ、「仏法のために命を惜しまず闘うべきであると衆議は一決した」とあり、これによって武装の御坊町、武装のたや衆の名が喧伝されることになる。⁽¹⁾ また、「一向一揆」の一向とは、一向宗即ち浄土真宗のことで、阿弥陀如来だけを救済者として尊敬し、一切の雑行を排して念仏一途に生きよ。西方極楽浄土の一方向だけを目ざせという意味で、さらに「一揆」の揆は、旗印のことで、一向一揆とは浄土真宗の発展をめざして人間集団として団結することだと意義づけられた。当時の乱世では、暴徒や搾取を目的の守護地頭の権力集団に対抗するには、集団的群居の町作りが最善の方法であったと考えられたのである。⁽²⁾

上記の吉崎御坊町のたや衆による一向一揆は、現実には、援助を求めた富樫政親の裏切りによって文明七年(1474)に結果的には失敗したが、戦乱の世に、武力に対しては身の安全を護る術を知らぬ百姓どもに団結によって対抗する術を教えた蓮如は、宗教人でありながらまれに見る民衆の政治家であったとすることができると思う。蓮如は、吉崎道場の焼き打ちを避けて吉崎を逃れて京に戻ったが、僅かに三年後には山科に松林山本願寺を建立し、さらに、明応五年(1496)には、今の大阪城の地に石山本願寺を建立している。豊臣、徳川とやがて天下の台所となる旧大阪は、蓮如のこの本願寺の門前町であったのである。又、さきに一向一揆を敗北に追い込ん

だ富樫政親は、蓮如が吉崎を去った後も、くり返し本願寺門徒との抗争を行ったが、長享二年(1488)に致命的な敗北をきって自刃して果てることになり、これによって加賀の国は、約90年間にわたり、この御坊町を中心とする本願寺門徒衆の「たや坊主」と「たや衆」の所領するところとなったのである。ここで、商人源流論の立場から、この種の寺内町の形成が、日本町人発生の温床として果たした役割について要約を試みたいと思う。これを一言で表現すれば、寺内町は、特殊商人の根性作りを行ったのではないかということである。他屋と多屋衆が町人の源流とすれば、彼らは宗教的結合の衆であったこと、即ち蓮如の説法した一向宗の信仰によって結集した御坊中心の作業集団と見ることができる。この地域の住民即ち町民は、共通の利害のために強固な仲間意識を持っていたのである。上記の吉崎御坊町の例で注目されるもう一つの特徴は、町自体が自衛のために城塞化していたことで、これが居住民町衆に特殊の根性作りを行った点を注目すべきだと思う。御坊町の住民は、多屋坊主を除けば俗人多屋衆だが、その構成は、商工業者の役割を果たす者とか、遠い地方の村落に家屋を持ちながら、御坊護りを目的として長期滞留する百姓門徒ら、あるいは参詣目的で短期的に滞在する者達などの総合であり、この信仰者による地域的集団が、こういう特別の環境の中で、特殊の人間形成を行なって、根性ある町人、或いは町衆が生まれ育ったということである。この御坊町を支えた経済は、加賀・越前の百姓らの一銭・半銭の喜捨の総合ということになるが、蓮如は大衆を結合させるに、まず「講」作りを教え、その講を「組」に拡大させ、やがてこれを総括してて巨大な門徒集団に発展させて、喜捨された零細な浄財の総合を、巨大な組織資本として具体化させたことになる。当時の百姓達は、領主の単なる生産手段であって、人間性も認められない悲惨な境遇にあり、現世はもとより来世の幸福の道さえも絶たれていた。蓮如は実証的に、経済的結集と人間的結合とによって、自分達の幸福を護

り、暴力権力と対抗できる組織作りをやって見せたのである。「在家無智の身を以て、徒らに暮らし徒らに明かして、一期は空しく過ぎて遂に三途に沈まん身が、一月に一度なりとも、せめて念仏諸行のため道場に集り、わが信心、他人の信心はいかがあるらんと信仰沙汰すべき」であると説いて、戦国乱世の世に人間的存在を確保すること、社会的運命を克服できる途を信仰心に結びつけて訓えたのである。このように信仰を手段として、社会的運命の克服を実践させ、人間存在の世界観を人びとに教えた蓮如は、秀れた宗教的革命指導者であったばかりでなく、彼の実践行動的布教活動は、日本町人（商人）形成に偉大な貢献をしたのではないかということである。

蓮如の寺内町作りは、彼が文明七年（1475）に吉崎御坊町を退去してからも続けられた。河内の出口、攝津の富田（現高槻市）、和泉の堺などに坊舎を建立し、布教も積極的に行ない町作りも行ったから、この意味から、特殊な町人作りにも貢献したことになる。本願寺系寺内町の中でも、山科（やましな）寺内町（永正元年～天文元年，1504—32）、石山寺内町（天文二年～天正九年，1533—81）は特に注目される。山科寺内町のごときは、交通の要地にあり、戦国大名の城下町に匹敵する構想を持っていたといわれる。⁽³⁾ 山科「八町の町」の住民構成の中に職人町人が多数居って、これらがやがて町人商人に変化していったのである。次に、石山寺内町も城塞型寺内町として大いに発展したが、この御坊の法主となった証如が『天文日記』を書いて、寺内町の構造、住民の町衆と町人の性格などについて資料として残している。商人論での源流さぐりの立場から、町衆と町人の語意の確認が必要だが、この天文日記では用語に明確な区別がなされず、町人研究者（日本の歴史・中井信彦）の解説では、「町衆とは町民に対する上からの呼称で、町人とは町民の自称的用語ではないか」と推定区別をされる。⁽⁴⁾ ただ、町人と商人の区別については、『吾妻鏡』以来の慣用語どうり、移動する商人、定住する町民としての町人という区別した意義づけが、この時代

の寺内町でもまだ存続していたようである。

次に、本項の結びとして、「職人町人」生成と職人商人形成をとりあげる。本論第二項で分析した大名の城下町作りも、蓮如の御坊町作りでも、町民構成の中に各種の職人集団があった。新しい町作りには職人作業が必須要件であったためだが、これらの職人達はやがて自己の技能から生産する物財を他に流通する方便を考える筈である。ここに職人商人の生成が考えられる。寺内町にも、城下町にも、各地に点在していた職人達が集中してくる。やがて同業者の連けいも生れてきて、同一業種の職人達が結合して座が生れ、権力に支えられて強固な組織と化してくる。室町時代の油紋職人の集団の油座や麴作りの麴座などその先駆の事例であったが、この職人の集中性を利用して形成された寺内町職人町がある。その代表例に南大和の寺内町今井（現橿原市）がある。この地に、室町期の文明年間に油仲買座、糖質座などが現れて、やがてこの今井が本願寺一家衆今井兵部をむかえて寺内町今井として発展することになったのである。職人町形成の別の好例として金沢御坊の寺内町における麴室座（こうじむろ）があげられるが、この種の職人町の形成は、日本商人の源流資料として注目すべき点だと思う。

参 考 文 献

1. 町人，坂田吉雄，弘文堂
2. 日本の歴史（町人），中井信彦
3. 私の蓬如，真継伸彦，筑摩書房
4. 註(1) 私の蓬如，P 116 註(2) P 112
5. 註(3) 日本の歴史，P 68 註(4) P 81
6. 歴代天皇紀，秋田書店

4. 日本海商町人の生成・堺町人の根性

本論の初めに、ヨーロッパの商人学の源流は、地中海の海港都市の貿易

商業の発達と、貿易通商技術の研究開発に求められると述べたが、わが国の場合は、せっかく対外通商の基盤作りができた段階で、海港町が戦国武将の戦乱の場となったり、幕府の政権保持目的の鎖国政策の犠牲になったり（1638年の完全鎖国）したために、明治政府の完全開国まで、対外通商技術の研究開発は著しく遅れてしまったということである。しかし、この鎖国期間においても、鎖国以前に芽生えた海商人根性は、幕府権力に圧迫されながらも、御禁制商品が出廻っていたことから、地下で根を張っていたものということになる。

本項では、徳川の完全鎖国（1638）以前の対外取引がどのように展開し、どの海港町がその據点であったかについて、商人論の源流接近という型で分析したいと思う。わが国の海商の源流は、すでに鎌倉期のころから始まり、支那海・朝鮮近海での、「和寇」という名の暴力海商に注目されると思う。西欧のマーカンティリズムの経済思想は、16・7世紀に芽生えたと見られるが、わが国の人びとも富を海外に富めるという考え方は、島国であって、海洋民族性を多分にもった九州・四国・紀伊・大坂湾岸などの海辺に居住する人びとの根性の中には必然的に生れついたものと思われる。わが国の場合、和寇的商法から前進して、海外への公認貿易船を初めて送ったのは、応永八年（1401）で、室町幕府の第三代将軍足利義満が、九州博多の豪商・肥富某の進言をいれて、進貢船の名目で、遣明貿易船を許可したのが始めだとされる。⁽¹⁾ つまり公認の貿易商人という町人の誕生である。将軍義満は、細川頼之の補助を受け、明德三年（1392）南北朝合一を実現し、室町幕府の最盛期を現出したが、日本の対外貿易を公許した特記すべき将軍でもある。なお応永十九年（1412年）には南蛮船が若狭小浜に来船するなど、対外通商の兆しが見え、わが国経済活動は、この室町幕府の政策によって一転機を印したことになるが、貿易による利益増に着目して、社寺大名の間に遣明船の公認について競争が行なわれ、海商商人の政治的裏工作も活発

化した。幕臣・細川と大内両者の競争は、堺商人和博多商人の激しい競争へ発展したが、「応仁の乱」(1467—1477)が始まるころ、遣明船は完全に博多より堺商人の手に移った。堺町人の豪放的商法によって巨額の富が堺にもたらすことになり、新しい海港町作りが始ることになったのである。

泉州堺は、攝津の国と和泉の国の二国に国境を持つ古い漁民部落から成長した町で、南北2庄からなり、南庄が和泉側に、北庄が攝津側で、両国に跨るため堺と呼ばれるようになったと言うが、はじめ塩湯浴の名所として知られ、後に熊野詣の路次、堺王子社の名で著名であった。鎌倉時代には堺莊と呼ばれ、海港としても背後に京都・奈良等の消費地を持ち、古くから輸送路の要地として商港の性格を持っていた。鎌倉幕府滅亡に係る「元弘の変」(元弘1—3, 1331—33)後、一時、南北争奪の対象となったが、地方領主・大内義弘がこの地を所領とした。当時の堺入口はすでに一万人を数えたという。海港としてにわかに発展したことの契機は、上記の「応仁の乱」が始って、幕府の遣明貿易船が兵乱を避けて堺に帰港したことからだという。従来は兵庫浦を起点としていた遣明船が文明八年(1476)以降この地が発着港となってしまった。南蠻船やシナ船の寄港もあって、まさに天下の海商港、海商町の風格を持つようになった。遣明船貿易から受ける巨大な利益は、貧しい農業経済の中へ重商主義の風を吹き込んだようなもので、遣明船の請負金額も一隻三千貫文から四千貫文になったという。海商商人が抱え込む利益が町自体を豊かにし、やがて彼らは豊かな町を護るために「会合衆」(えごう)という豪商実力者を結集して自治組織を作り出したのである。室町幕府は、政略的には「政所」という地方役所を設置したが、町行政は、この会合衆の自治に委ねた形であった。町人自治は初めは、「納屋貸衆」(なやがし)によって行れたが、やがて36人組織の会合衆の合議体制へ発展したのである。幕府のねらいは、海商人主体の特殊な権力集団に自治を許すことの代償として、彼らから財政上の納付金をより多く獲

得することにあつた。この堺の町人は、海商達の外国通商から得た資金の蓄積と財力によって、戦国時代にありながら、武家政治の暴力から自己を護る集団的自治権を獲得したことは、西欧諸国における古い海港都市の政治的豪商集団の事例と共通するものがあると思う。戦国時代の他の地方での町作りは、すでに指摘したように、武力的領主の膝下での城下町か、著名な仏寺の門前町か、さらに蓮如ゆかりの御坊町などの事例に見たが、堺の場合は異色の町作りであつたと思う。

上記のように堺の町作りが異色であつた点は、堺商人とこれを含めての堺町人の特質あるいは町人根性とも関係づけられる点だと思う。すでに指摘したように、わが国海商商人の源流は、武力的海商即ち「和寇」に由来することになるが、堺海商商人の源流にもこの種の経験者が多数いたに相違いない。また、彼らの仲間には、当時の戦国武士くづれや、武家の二・三男坊からの転身者なども参加して海上通商の危険に備えたから、彼らの性格や気風には自然に特殊な気骨が染み込んでいた。巨額の財力を得て豪商化すると、政所の役人を恐れるどころか、彼らが作り上げた特殊の文化・

「茶の湯」などの交流の席上では、上級武士とも対等につき合う程になり、やがて、武家達の権力争いに調停の役を買って出る程になっていた。このことは、堺の豪商達の特殊な実力を示すもので、室町幕府は、天文年間(1532—55)の財政窮乏の折には、救済を堺豪商に求め幕府勘定方役人は、彼らと呼ぶに「老」の敬称をもって応待したと伝えられている(竹越、日本経済史)。しかし、巨富を得て、財力をもって自らを恃むようになった堺の町人達は、一般に自我意識が強烈で、自治組織を結成しても、その自治体は、個々人の利益の結合性を原則とするゲゼルシャフト(利益共同体)的性格が強く、さきに例示した御坊町の多屋集団のようなゲマインシャフト(人間的・心情的運命共同体)的性格が少なかったようである。堺の町民は財力を信じた。巨大な財力の前には戦国的武将も頭を下げる。財力は武力に

優先すると過信した。堺の町民が、財力に依存する唯物的信条の地域社会作りに成功したのに対し、御坊町の一向衆徒らは一銭一厘の貧者の信仰的町作りに実績をあげたのである。豊かな町社会には現世的文化は誕生したが、来世的な文化は生れなかった。蓮如も堺を訪れ御坊を建立したが、町人達は来世に希望を求める程、現世で窮迫していなかったのである。当時、キリスト教宣教師も堺に定着して布教につとめたが、九州各地で数十万人の信者を獲得したが、堺の町民は見向もしなかった。そこで宣教師は、堺町人の気風を評してこう言っている。「彼等は、もし彼らが天国に行きたければ、どうしても自分の債権と俗世の名望を捨てなければならないのだ説くと、彼らは、天国へなど行きたくないと言い切る始末であった」(フロイス、日本史)。また、「堺町人は甚だ傲慢で、裕福であるけれども、デウスより、聖く汚れなき教を受くの価値なし」と(耶蘇会士通信)。(2)

本項のむすびとして、堺の町人が生んだ文化的教養の諸点に注目する。経済的豊かさから生れた、生活藝術は堺町人の根性を知るに役立つと思う。その第一の生活文化は、「茶の湯」の道である。この茶道の大成者は千利久で(1521—91)、堺の生れである。彼は、安土桃山時代の茶道に、従来の形式性を排して、精神的内容を導入した。「佗」(わび)の心情を吸収したといわれるが、彼は、この道で織田信長と豊臣秀吉に仕えて眷遇を受けた。利久のわびの茶道は、禅の境地に係るもので精神的茶道であった。その由来は、臨済宗の名僧一休(1391—1481)が、奈良称名寺の僧珠光に、その禅道と共に伝授し、珠光は茶道の根本精神を「謹敬清寂」の四文字に表現して、禅道の佗びの境地と茶道の境地の一体化を試みたのである。しかし、利久は、時の権勢者信長や秀吉に仕えて、茶道の隆盛に貢献したことことから、珠光より利久の名声が後世に伝っているようである。堺町人は、上記のように宗教的救いには無関心であったが、生活の餘裕ができて何らかの文化的教養へ接近しようとする環境にあった。この要件に茶の湯の道が適合し、

禅が教える「侘び」の境地と、これを誘導するための「数寄」の道が生れた。「数寄」の条件には、家屋・庭園・器具など高貴の茶の湯の道具が必要になり、この「わびと数寄」の二重の条件は、富裕の町人達の特権的欲望の充足手段と適合したことになる。財力の豊さを示す一切の条件を具備して、主客相對して一服の茶を喫することの「侘び」が豪商達の最高の救いであったのかも知れない。しかし、彼らの「侘び」は、禅僧が追求した精神的な静の境地から外れて、形式化された安心追求となって、その飾りの「侘び」のために、豪商は千金を惜しまずという風潮を作ったのである。この堺の富は珠光の茶道の根本精神を墮落させたということである。

堺商人を特徴づける第二の文化的教養は、庶民文芸の発見であった。かつて貴族の教養として発達した和歌・連歌・能などの貴族文化の所産を、彼らの富と生活の安泰さによって町人文化へ変革させたことである。貴族的教養の連歌を大衆的・社交的連歌に変え、また、享樂的な小唄・「隆達節」が熱狂的に流行を見せた。この堺町人の貴族化は注目されるが、年代で見ると、元龜(1570—72)、天正(1573—1591)、文祿(1592—95)、慶長(1596—1614)と約40年余の時代風潮で、海商の爛熟期の姿である。しかし、貿易商都堺にとって爛熟は下降への始りで、新しい武士階級の支配、中央集権的封建体制が、繁榮に酔う堺の自治組織を崩し、武士階級への下屬と屈服を余儀なくさせるようになるのである。具体的始りは、永祿十一年(1568)の織田信長の「矢錢」賦課金2万貫である。これに対して、初めは拒否して自己防衛の虚勢を示し、櫓を築き濠を深めて戦闘に備えたが、翌十二年には、信長の激怒を恐れて、要求の2万両を納めて宥恕を乞うたのである。これに依って、数十年に亘った不敵な自尊心は一気に崩れ、堺町人の結団は彼らが生命や富を犠牲にしても守り抜くという気概が既に消失していることが実証された。従って、信長に次いで秀吉の代になり、天正十一年(1583)に大坂(阪)に築城されると、秀吉の要請によって、堺の豪商達は

新しい城下町作りに協力参加せざるを得なくなった。戦国時代を克服して絶対権力を持つ中央集権的体制ができあがると、かつて数十年にわたって、戦国領主達の対立の隙間に介在して、奇跡的繁栄が続けられた安定の条件が崩れたのであり、もはや、特定地域の町人共同体として、武士階級の権力に対抗し得なくなったということである。文明八年(1476)、遣明船の基地化以来、約一世紀にわたって確保された独占的海商港の役割も、次第に分散化し、新たに平戸・長崎・博多・大分などに移り、地方の港町商人の活躍の場に移った。堺町人の形成した地域共同体は一見強固に見えて、はかなく消え去ったのだが、かつて徳川の町人論を書いた坂田吉雄氏は、その根本理由を次のように適切に分析されている。「堺商人は巨大な富を擁していた。しかし、彼らは社会的経済機構の中枢を握ったとは言えない。彼らは商業行為によって巨大な富の蓄積した。しかし、その商業行為は未だ社会的のものでなく、地方的局部的のものであり、その商業行為は、海外貿易による奢侈品の売買であったから、彼らの存在は、社会経済の上から言って重要性を持ち得なかった」⁽³⁾ ということである。もし、彼らの商活動が社会経済的役割を果して居たら、武家政権に容易に屈服することはなかったであろうと思われる。

参 考 文 献

1. 日本史辞典，東京創元社
2. 町人，坂田吉雄，教養文庫，弘文堂
註(1) P135，註(2) P149，註(3) P157
3. 私の蓮如，真継伸彦，筑摩書房
4. 歴代天皇紀，秋田書店

5. 日本商人の源流「行商人和市商人」

さきに例示した『吾妻鏡』では、鎌倉の町作りについて、町人と商人を区別つけたと指摘した。また、この区別は室町期でも、証如の書いた『天

文日記』(天文十一年、1542)の記録では、町人は寺内各町の正式な町衆だけで商人は含まずとしている。この定義づけからすると、商人とは行商人または、市売商人を意味することになる。町作りを行いこれを主管する権力者は、政策的行政目的から、町人という居住権者を特別資格づけて、定着居住者を自己の政治権力に協力する存在として別扱いしようとしたと理解する。わが国では鎌倉幕府が始めて町作りにより一般庶民の定着居住原則を打出したものだが、それ以前は庶民の生活は移動性が原則であったようである。封鎖的荘園経済で拘束されていた農民百姓達は自主的でない定着居住を強請されたが、行動の自由が得られる者達は、自然の物産を他の地方に持歩いて原始的な物交的流通活動を行っていた。行商という交換商の源流は物物交換であるが、わが国の古代の行商の記録では、薬師寺僧景戒が、弘仁十一年(820)に編纂した日本最古の仏教説話・「日本霊異記」によって、雄略天皇の五世紀年代、次いで欽明天皇の六世紀年代から原始的流通活動があったとされる。当時、伊勢、奈良で行商した者を「販夫」(いさぎびと)又は「連着」(れんじゃく)と呼んだという。平安時代の行商人については、藤原明衡(11世紀平安時代の文学者)が書いた「新猿楽記」によると、行商人の首領が隊商を組んで、東は奥羽から西は西海鬼界島まで渡り歩いたと記録している。不安定な時代で荘園的権力者が支配していた時代の旅商は危険であるから隊商化した流通活動であった。しかし、鎌倉期に入り、次いで室町期に入ると、鑄造貨幣が流通し始めたので、地方の物産商人が活動を始め、彼らは領主、大名への年貢の輸送を引受けたり、座を結成して一定地域を限って座の生産物を商なって巨利を得る者が現れた。各地の特産物は、この種の行商人達によって各消費地に出廻るようになったので、大名・領主達も財政上の理由から行商人活動の利益を見直すようになった。「振売人」といわれた行商人は、その頃、自然発生的に、社寺の門前、交通の要地、地頭・荘官の住居地などで生活物資の流通が起る「市」

に参加したり、それぞれの市を廻って市町人の消費活動に特殊な役割を果たしたが、鎌倉幕府は、すでにさきに指摘したように、町作りの過程で行商人活動には規制措置をとり、市町の流通には、町屋居住の「見世棚」売りの町人商を優遇した。従って市町では居住商主義の流通であったようである。室町時代も、市町流通は町屋商人優先の政策が原則としてとられたから行商人の活動は著しく窮屈になった。町屋商主義の流通活動から、「座」制の独占志向の弊害が現れると、大名は庶民の生活救済の名目で、「楽市」などという名目で自由市場流通方式によって、特産物、穀物、海産物などが、自己の領域に豊富に集積することを考えた。ここで行商人商は再び積極的に参加して、物資の流通活動に実績をあげるようになって、町人商と対抗するようになる。室町期に終る商人の源流論は、町人商と行商人商との競争の過程で、新しい商人源流時代として、徳川幕府の大坂町人と江戸町人との競争時代へ移行することになるのである。

ここで、本項は、結びとして日本の商人のシンボリック存在と見られ、かつ日本の商業資本主義の形成に重要な役割を果たした通称「近江商人」の形成と性格について一言したい。近江商人の源流は、鎌倉、室町時代にさかのぼり、湖東諸村出身の商人達が固い結合と協力主義で、行商という方式をとりながら、近隣から全国的に商業活動を行って、商業資本の蓄積に成功したということである。彼らが当初取扱った商品は、八幡の蚊帳・畳表、呉服・太物、日野の薬種などであったといわれるが、広く上方文化の製品を地方に運び、又、地方物産を開発して上方加工を図るなど各方面で広く成功を収めて、ついに「近江商人」の名を全国的に広めている。彼らの商売に対する根性は、忍苦の精神、経営上の秀れた商才等でその名声を作りあげたことと思うが、近江出身の商人達の性格、思想、世界観、価値観については商人論の本質的課題として別項で扱うことにしたいと思う。

参 考 文 献

1. 日本史辞典，京都大学国史研究室 東京創元社
2. 日本の歴史（町人），中井信彦，小学館